

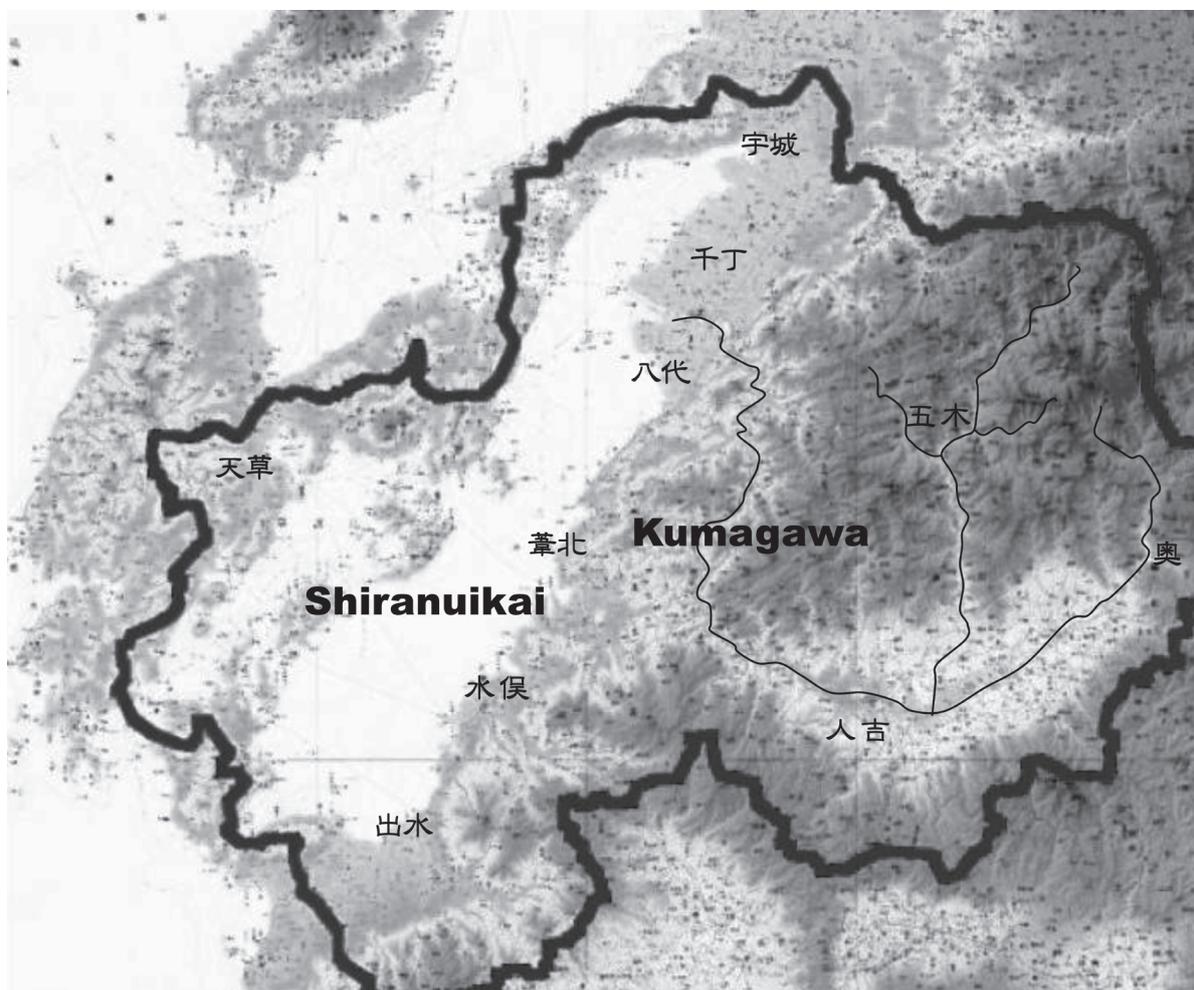
# しらぬい くま

第19号

2015年9月

内容

- 平成 27 年度総会・研究発表会報告
- 平成 27 年度第 1 回現地見学会報告
- 平成 27 年度第 2 回現地見学会案内
- 初めての外国への研究航海
- 八代海沿岸の地名⑦日奈久と火流浦
- 球磨川の「はね」
- 新事業「残したい水ものがたり」登録地承認報告



不知火海・球磨川流域圏学会事務局

熊本県熊本市南区城南町東阿高 1136-6

Tel & Fax: 0964-26-2003



# 平成 27 年度総会報告

不知火海・球磨川流域圏学会 平成 27 年度総会

日時：平成 27 年 6 月 7 日（日）午前 10 時 会場：熊本高等専門学校八代キャンパス 1 階合同講義室

出席者：43 名（出席者 27 名，委任状 16 名／会員 98 名）

議題：

◆総会式次第 司会：時松雅史

1) 開会 (副会長) 森山聡之

2) 会長挨拶 (会長) 堤 裕昭

3) 議事 議長：小川滋

1. 議長選出

2. 平成 26 年度事業報告・平成 26 年度会計報告 (会計) 坂井米夫

3. 会計監査報告 (監査代理人) 大塚勝海

4. 平成 27 年度事業計画案提案 (総務) つる詳子

5. 平成 27 年度予算案提案 (会計) 坂井米夫

6. 「残したい水ものがたり」登録地承認 (副会長) 森山聡之

7. 委員の追加 (提案) (総務) つる詳子

8. 質疑

10. その他

4) 閉会 (副会長) 森山聡之

◆平成 26 年度事業報告

① 平成 26 年度大会総会 5 月 31 日 (土) 人吉市中小企業大学 中会議室

② 平成 26 年度研究発表会 5 月 31 日 (土) 人吉市中小企業大学 大会議室

③ 第 1 回現地見学会 6 月 1 日 (日) 「人吉地域の歴史と自然を観る」

④ 第 2 回現地見学会 10 月 19 日 (日) 「上天草の自然と歴史に学ぶ」

⑤ 新事業「残したい水ものがたり」開始

⑥ ニュースレター発行 年 2 回 (9 月および 4 月)

⑦ 学会誌発行 平成 27 年 6 月中旬

⑧ 理事会開催 (6 回) 平成 26 年 8 月 6 日, 9 月 30 日, 12 月 5 日, 平成 27 年 1 月 22 日, 3 月 13 日, 5 月 22 日

⑨ facebook ページ・facebook グループの開設

◆平成 26 年度会計報告

(収入の部)

名 目	内 容	金 額	備 考
個人会費	3,000円*75名	225,000	
団体会費		0	
繰越金		6,594	
雑収入	学会誌・PDF販売等	2,500	
	発表会参加費	55,500	
	剰余金	30,540	現地見学会等の剰余金
	雑収	5,500	
	利息	18	
計		325,652	

(支出の部)

名 目	内 容	金 額	備 考
郵便代	4回送料+ハガキ	29,896	ハガキ寄付あり
学会誌作成費	編集・印刷	100,000	未納入の為準備金として
ニュースレター作成	2回/年	0	
事務経費		8,925	コピー、チラシ等
HP維持費		5,000	
会場費	会場費	38,000	総会・発表会会場費
雑費	講師謝礼	10,000	
借入金残返済		100,000	借入れ金残50000円
慶弔費		2,290	
次年度繰越		31,541	
計		325,652	

繰越金 (信用組合31,361円、振込口座180円)

監査 沢畑亨

◆平成 27 年度事業計画

① 平成 27 年度大会

総会 日時および会場：6 月 7 日（日） 熊本高等専門学校八代キャンパス 1 階合同講義室

研究発表会 日時および会場：6 月 7 日（日） 熊本高等専門学校八代キャンパス 1 階合同講義室

② 第 1 回現地見学会 6 月 6 日（土） 「八代の城下と日奈久を歩く」

③ 第 2 回現地見学会 10 月 24 日（土） 「秋の五家荘探訪（仮称）」

④ 「残したい水ものがたり」一般公募開始

⑤ ニュースレター発行 年 2 回（9 月および 4 月）

⑥ 学会誌発行 平成 28 年 4 月末日

⑦ 理事会開催 6 回／年

⑧ 会員拡大 目標 130 名（平成 26 年 4 月 25 日現在会員 96 名）

◆平成 27 年度予算案

(収入の部)				(支出の部)			
名 目	内 容	金 額	備 考	名 目	内 容	金 額	備 考
個人会費	3,000円*95名	285,000		郵便代	((90*4) + 52)*95名	39,140	4 回発送+ハガキ
団体会費		0		学会誌作成費	印刷	100,000	
繰越金		31,541		学会誌編集費	編集	30,000	
雑収入	学会誌・PDF販売等	20,000		ニュースレター作成	2 回／年	30,000	
	発表会参加費 寄付金	70,000		事務経費		30,000	コピー、チラシ等
計		406,541		H P 維持費		5,000	
				会場費	会場費	30,000	役員会・総会・発表会会場費含
				雑費	講師謝礼	10,000	
				借入金残返済		50,000	借入れ完済
				予備費		82,401	
				計		406,541	

◆新事業「残したい水ものがたり」平成 26 年度登録地

「残したい水ものがたり」事業とは、「不知火海・球磨川流域圏内の、将来に残したい水辺環境を、当学会が認定することによって、流域圏内の守るべき水辺の存在を県民に知らせていく。」ことを趣旨に、平成 26 年度から始まった事業で、県内の水辺 6 カ所が今大会で承認されました。結果や今後の募集については今後ネット等を通じて公開していく予定です。

平成 26 年度承認された水辺（6 カ所）：荒瀬ダムボートハウス（八代市坂本町）、黒淵河川自然公園（八代郡水川町）、深水湿原（相良村）、大野川河口（宇城市不知火町）、球磨川河口水島地先干潟（八代市）、雨宮神社（相良村）

◆その他

① 役員外委員の追加提案があり、高平雅由氏が承認されました。



研究発表会の風景（左）ポスター発表、（右）口頭発表

## 平成 27 年度研究発表会報告

平成 27 年度の研究発表会が平成 27 年 6 月 7 日（日）午後 1 時から、熊本高等専門学校八代キャンパス 1 階合同会議室において開催されました。今年は当会設立から 10 年目にあたり、例年の研究発表に加え、10 周年記念プログラム、及び昨年から始まった「残したい水ものがたり」事業の推薦地ポスター展示もあり、とても内容が充実したものになりました。また、今回はポスター発表にコアタイムも別途設けましたので、例年よりポスター発表を十分に聞くことができ、どのポスターの前でも説明や質疑が熱心に行われていました。会場が熊本高専八代キャンパスであったため、設備も充実しており、大変助かりました。ご協力下さった皆様に改めてお礼申し上げます。

## ◆第一部 記念プログラム 13:00～14:30

- I 10 周年記念講演 「覚えているでしょう、『月明学校』を」 ----- 前山光則（元高校教師）
- II 10 年を振り返って ----- 大和田紘一（不知火海・球磨川流域圏学会前会長）
- III 10 年間の活動紹介 ----- つる 祥子（不知火海・球磨川流域圏学会事務局）

## ◆第二部 口頭発表 14:45～17:00

- I アサリ養殖の手法 ----- 藤原成治（八代漁業協同組合参事）
- II 堆積物の微量元素からみた球磨川、川辺川流域の環境評価 ----- 石賀裕明（島根大学・総合理工学部教授）
- III 球磨川下流域における自然再生に向けた取組みについて  
荒木 和幸（国土交通省 九州地方整備局 ----- 八代河川国道事務所 副所長）
- IV 熊本県のアサリ漁業の衰退の原因と再興の鍵を探る ----- 堤 裕昭（熊本県立大学・環境共生学部教授）
- V 球磨川萩原堤のはねの残存状況と保存活用策の提案  
----- 磯田節子（熊本高専八代キャンパス特任客員教授）、森山 学（熊本高等専門学校准教授）・溝口稔也・梅木 氣・  
椎葉将人（熊本高等専門学校専攻科 2 年）
- VI 流域生態圏管理の考え方について－『森林環境と流域生態圏管理（小川 滋 編著）』の視点－  
----- 小川 滋（九州大学名誉教授）

## ◆ポスター発表 11:00～12:00（17:00 まで継続展示）

- I ICT を活用する土木系演習授業での「赤崎水曜日郵便局『灯台ポスト』」への取り組み  
----- 入江博樹（熊本高等専門学校 建築社会デザイン工学科）・建築社会デザイン工学科 4 年社会デザインコース  
学生（平成 25 年度 21 名）
- II 緑川河口におけるホトトギスガイの衰退過程における物質循環の特徴  
----- 竹中理佐（熊本県立大学大学院・環境共生学研究科）
- III 佐敷干潟におけるアサリ（*Ruditapes philippinarum*）個体群の季節変動とその要因  
----- 西岡祐玖（熊本県立大学大学院・環境共生学研究科）
- IV 阿蘇地域のヒノキ高齢林における遮断率の観測  
----- 永野美穂（熊本県立大学大学院・環境共生学研究科）\*、井上昭夫（熊本県立大学・環境共生学部）、丸山篤志、  
宮沢良行、高木正博、大槻恭一
- V 諫早湾における底生生物の分布と環境要因との関係 ----- 石松将武（熊本県立大学大学院・環境共生学研究科）
- VI 菊池川河口域における生息地の高塩分化がヤマトシジミの個体群動態に与える影響  
----- 辻美里（熊本県立大学大学院・環境共生学研究科）\*・堤 裕昭・小森田智大（熊本県立大学・環境共生学部）
- VII 球磨川下流域の環境デザイン及び利用促進の提案「球磨川でもう一度水遊び」  
----- 重田侑馬（熊本高等専門学校八代キャンパス・生産システム工学専攻 1 年）
- VIII 奈良木神社の建築的特徴と神仏分離に関する考察 ----- 石早野彰人（熊本高等専門学校・専攻科 1 年）

# 不知火海・球磨川流域圏学会 平成 27 年第 1 回現地見学会報告

— 八代の城下と日奈久を歩く — 林裕美子

肥後の国では、すでに 14 世紀の室町時代に古麓（ふるふもと）に山城が築かれ、ふもとに城下町が栄えました。その後の戦国時代に何度か城主が変わったのち、16 世紀の末には球磨川の右岸の平地に麦島城が建てられました。当時は前川がまだ掘削されていなかったため、城の北側は大きな入り江になっていて、城は海上交通の要所でした。17 世紀に加藤清正が熊本城主になると、重臣の加藤正方が麦島城の城代になります。江戸幕府が一国一城令を出したため、熊本藩内の城はいくつか取り壊されましたが、麦島城は例外的に存続しました。しかし 1619 年の大地震で倒壊してしまいます。そこで清正の子が前川の北岸の松江に新たに八代城を築き、一国二城が続きました。熊本藩主が細川家になると、細川三斎のあと松井興長が城主になり、その後は明治時代まで松井家が居城しました。2015 年 6 月 6 日（土）の現地見学会の午前の部では、この八代城跡や周辺に残る古い建物を「案内人の会」の中村重之さんの解説を聞きながら散策しました。天気は晴れ、八代市立図書館の横にある松浜軒の駐車場に 17 名が午前 10 時に集合しました。まずは、



図 1 現地見学会の午前の順路（八代城跡周辺）

駐車場から道路を隔てて見える松浜軒です。今回の現地見学会は、流域圏学会のみなさんにお会いするのが目的だったので、実は恥ずかしいことに予備知識ゼロで参加しました。時間ギリギリに着いて、みなさんが口々に「ショウヒンケン」の話をなさっているのを聞いて、何のことかわからず戸惑いました。案内の紙を引っ張り出して読み直して、やっと松浜軒のことだとわかりました。

松浜軒は、八代城の松井家三代城主・直之が生母・崇芳院のために御茶屋として 1688 年に建てたものです（図 2）。明治 3 年の廃城で八代城が国有になったので、十代城主・章之は松浜軒を増築して居住しました。現在は、庭園が公開されています。入り口には、「花菖蒲が、今、みごろです。5 月 25 日、6 月 1 日、8 日（月）は開苑します」の張り紙がありました。手入れが行き届いた木立を抜けると、大きな赤女ヶ池が広がり、白・紫・青の花菖蒲が咲いていました。池の向こう側には二階建ての日本家屋が見えます。池に突き出た一間は「白菊の間」と呼ばれます。建てられた当初は、池を隔てた松林の向こう側には砂浜が広がっていたそうです。今は周辺に松はなく、300 年余りのあいだの干拓によって、松浜軒は海から 5 km 内陸に位置することになりました。しかしこの干拓によって幕府に見つからない田を増やし、公称 3 万石の松井家は、実質は 10 万石とも 16 万石とも言われるようになりました。



図 2 1688 年に建てられた松浜軒

庭の西のはずれの目立たない場所には「船つなぎ」だった石積みがありました。松浜軒が海に面していたことが偲べれます。そこから稲荷大明神を祀った社の前を通って白菊の間の前に出て庭を一周しました。白菊の間は屋内見学させてもらえるようですが、この日はたまたま茶会が開催されていたので入れませんでした。敷地の出口付近の昔の馬屋は小さな博物館に改装して、松井家の所蔵品を展示してあります。家計図や、家宝の木刀（宮本武蔵が佐々木蔵流との仕合で使った自作の木刀の複製）、陶器や木工品などの工芸品がガラスケースの中に並べられていました。ひときわ私の目を引いたのは、「象嵌三笹紋（みつぎもん）桜文徳利」（八代焼・上野東四郎作）という陶器でした。灰色の地に白い模様が美しい蓋つきの徳利で、お酒がさぞ美味しかろうと思わせるものでした。

松浜軒をあとにして道路をわたり、八代市立博物館（未来の森ミュージアム）を横目に見ながら南へ歩くと「澤井家住宅および長屋門」に着きました。澤井家は室町時代に足利家に仕え、その後、細川家から松井家に仕えるようになり、用人や奉行などの要職を務めました。八代城の周りには、警備も兼ねて、こうした重臣たちの屋敷が並んでいました。江戸時代のたたずまいを伝える武家屋敷で八代に唯一現存するのが、城下の西の一角にあった澤井家住宅と馬屋を兼ねた長屋門です。木造 2 階建ての棧瓦葺き住宅は 1865 年に建てられ、漆喰壁に板張りの腰壁をあしらった長屋門は江戸末期に建てられました。住宅は現在も澤井元生さんの住居として使われています。この日は、あらかじめ屋内見学をお願いをしていなかったのですが、飛び入



図3 澤井家の欄間

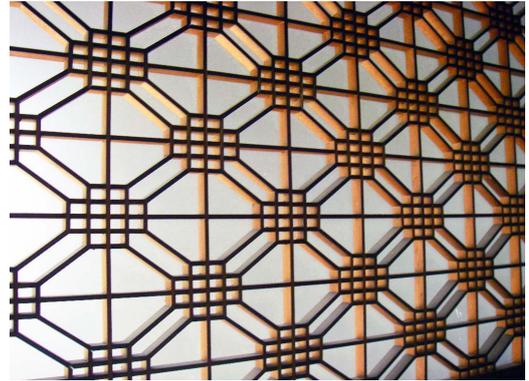


図4 澤井家の付書院の障子

りの見学をさせてもらえることになりました。朝食の最中に20人近くが縁側つきの二間に上がりこんでしまうことになり申し訳なかったのですが、素晴らしいものを見せてもらえて幸運でした。

錠口の揚戸（あげど）に設けられた潜戸（くぐりど）から屋内に入ると、土間の正面に居間があり、左手が書院造りのお座敷でした。手前の6畳間の違い棚には、由緒ある品々が飾られていました。城主証を見せていただき、刀を手にとらせていただきました。奥の8畳間とのあいだの欄間は印象的な透かし彫りで（図3）、付書院の障子（図4）と欄間の棧も手の込んだ作りでした。見学はこの2間だけでしたが、2階や中2階にも部屋があるそうです。入り口の案内板には隠し部屋もあると書かれていたので、中2階が隠し部屋だったのかしらと想像しながら、澤井さんに皆でお礼を言って、お屋敷をあとにしました。

続いて向かったのは八代城跡です。冒頭で書いたとおり、八代城は、加藤家二代目藩主の忠広が松江に築城を命じて1622年に完成しました。本丸の北西に4層の天守閣と二層の天守閣、それと櫓（やぐら）7棟が建てられました。石垣には石灰岩が使われたので、白鷺城とも呼ばれました。その後、小倉にいた細川忠利が熊本藩主になり、父・三斎（忠興）を城主にしました。三斎の没後、2代目光尚が筆頭家老だった松井興長を藩主並みに重んじて八代の城主にしました。細川家と松井家の関係はその後も続き、八代城は家老の城として代々受け継がれました。ところが1672年と1797年の落雷で天守・櫓（やぐら）・本丸大書院が消失してしまいます。大書院だけは再建されたものの、明治の廃城後に国有となって八代宮に保存されることになりました。1940年頃までは図書館や市役所の建物として利用されていましたが、区画整理のために石垣とともに取り壊され、外堀も埋め立てられました。八代城跡に残るのは、修復を重ねた石垣と堀の一部となり、現在は公園になっています（図5）。



図5 八代城跡（石垣）

城跡を北へ通り抜けると、道路の向こう側に松井神社が見えます。ここはもともと、八代城の北の丸だった部分で、細川三斎が数奇屋を築いて庭園整備を進めた場所です。そこに三斎が自ら植えたと言えられる梅「臥龍梅（がりゅうばい）」が今も花を咲かせます。本当に三斎が植えたのならば、370年くらいの老梅ということになります。緑の中に黒々とした太い幹が地を這うように伸びているのを見れば、命名も納得できます。花が咲いているときに来てみたいと思いました。

神社の木立を北へ通り抜けると、織田信長の五輪塔がありました。なぜここで織田信長なのだろうと、歴史に疎い私は思いましたが、ここの庭園整備を進めていた三斎は、若い頃に織田信長に仕えていたのでした。三斎の正妻は明智光秀の娘の玉（ガラシャ）です。三斎は、信長が光秀に討たれたあと菩提を弔った寺を丹後につくりました。それを自分が移動した小倉へ、さらに八代へと移していたのです。明治に廃寺となり、本堂や梵鐘は他の寺に移されましたが、五輪塔は今でも元の場所に鎮座しているということです。五輪塔から松浜軒の駐車場はすぐでした。午前の部を終えた参加者は、木陰で一休みしたあと車に分乗して、午後の見学会がある日奈久（ひなぐ）へ向かいました。

日奈久は八代市街地から南へ15分ほど走ったところにあります。JA倉庫を体育館のように改造した多目的室に椅と机を並べて、昼食のお弁当をいただきました。午後の参加者は18名で、高田栄昭さん（日奈久温泉街・案内人の会）に案内していただきました（図6）。

日奈久の温泉は、甲斐重村の家臣だった浜田右近が菊池の戦で刀傷を負ったときに、息子の六郎左衛門が父の平癒を願って、市杵島姫命（いちぎしまひめのみこと）のお告げにしたがって干潟の石をどけて探し当てたと言われています。親孝行の湯と言われるゆえんです。掘り当てたのが1409年のことなので、600年も続く温泉です。海に面している港は、帆かけの底引き漁船や、五目釣りなどの漁船で賑わいました。日奈久の温泉街なら魚は何でもさばけたのです。しかし、球磨川に堰ができてから不漁が続いているそうです。流れが変わってしまったからかもしれないと考えられています。



図7 洋服屋の軒先に並べた商品の服の上でくつろぐ猫



図8 村津邸に残るなまこ壁（亀甲壁）の土蔵

JAの倉庫の脇の港から国道3号線をわたって山のほうへ路地を歩きました。ブーゲンビリアやアジサイをきれいに咲かせている家が続きます。道端には小さな祠があり、目の神様、歯の神様、足手の神様がまつってありました。どこも、ささやかなお供えがしてあり、花が生けてあり、神様が大切にされていました。洋服屋が軒先に並べた商品の服の上には、猫がくつろいでいました（図7）。猫も大事にされているのでしょう。急な斜面のふもとには、昔の道幅のままの薩摩街道があり、村津邸などに、なまこ壁（亀甲壁）の土蔵が残っています（図8）。過去に大きな火事が何度もあり、防火対策として蔵が整備されました。

薩摩街道を日奈久温泉駅の方へ少し歩いて、高田（こうだ）焼きのお店に立ち寄りました。高田焼きにも窯がいくつかあるようですが、そこは上野（あがの）窯でした。400年くらい続いているそうです。象嵌陶器の上野窯と言え、松浜軒の博物館で見た徳利は、上野東四郎作でした。白い模様の象嵌をどのように作るのか、制作一段階ごとの製品を並べた棚の前で、お店の人が説明してくれました。成形した生乾きの素地に竹べらなどで模様を掘り、そこに白土を埋め込んで、透明釉をかけて焼くそうです。色調といい、模様の端麗さといい、私ごのみの美しさでした。記念にぐい飲みを買いたかったのですが、手が出る値段ではありませんでした。

お店を出たあとは、温泉神社へ続く坂道をのぼりました。途中の展望がきく場所では、不知火海を隔てて天草や島原の普賢岳が臨めました。神社のふもとには、小さな舞台と、急坂を利用した棧敷がありました。棧敷席の上段から相撲を観戦している人々のようすを撮った古い写真を案内人の高田さんが見せてくださいました。今はほとんど使われていませんが、以前の賑わいが伝わってくる写真でした（図9）。そこから急な石段を登ると温泉神社があります。温泉を掘り当てた浜田六郎左衛門にちなんで六郎神社とも呼ばれ、脇にある170年生のケヤキ（幹周2.9m）の下にはお告げの石も祀ってありました。さらに斜面を登ると稲荷大明神を祀ってある

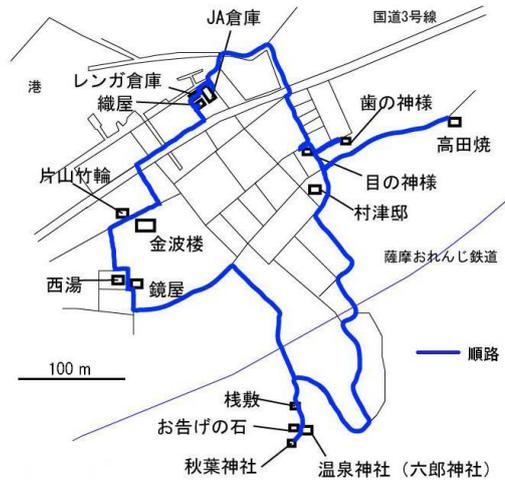


図6 現地見学会の午後の順路（日奈久温泉周辺）

JAの倉庫の脇の港から国道3号線をわたって山のほうへ路地を歩きました。ブーゲンビリアやアジサイをきれいに咲かせている家が続きます。道端には小さな祠があり、目の神様、歯の神様、足手の神様がまつってありました。どこも、ささやかなお供えがしてあり、花が生けてあり、神様が大切にされていました。洋服屋が軒先に並べた商品の服の上には、猫がくつろいでいました（図7）。猫も大事にされているのでしょう。急な斜面のふもとには、昔の道幅のままの薩摩街道があり、村津邸などに、なまこ壁（亀甲壁）の土蔵が残っています（図8）。過去に大きな火事が何度もあり、防火対策として蔵が整備されました。

薩摩街道を日奈久温泉駅の方へ少し歩いて、高田（こうだ）焼きのお店に立ち寄りました。高田焼きにも窯がいくつかあるようですが、そこは上野（あがの）窯でした。400年くらい続いているそうです。象嵌陶器の上野窯と言え、松浜軒の博物館で見た徳利は、上野東四郎作でした。白い模様の象嵌をどのように作るのか、制作一段階ごとの製品を並べた棚の前で、お店の人が説明してくれました。成形した生乾きの素地に竹べらなどで模様を掘り、そこに白土を埋め込んで、透明釉をかけて焼くそうです。色調といい、模様の端麗さといい、私ごのみの美しさでした。記念にぐい飲みを買いたかったのですが、手が出る値段ではありませんでした。



図9 案内人の高田さんに見せていただいた棧敷席から相撲を観戦している人々の写真

秋葉神社にたどりつきました。階段を上るときには段数を数えることが多いのですが、少々暑かったせいか、数え忘れしました。撮った写真から推定すると、棧敷席から秋葉神社まで200段くらいだと思います(図10)。

坂を下りる途中には桑原竹細工の店がありました。ここも入ってみたかったのですが、時間がなかったので、そのうち改めて訪ねようと密かに思いました。さらに下ると温泉街でした。明治22年創業の一番古い鏡屋は、今は温泉宿はしていません(図11)。古い建物の入り口だけ見せていただきました。すぐ向かいにあるに共同温泉の西湯には、昔ながらの風呂場が残っているので見学させてもらおうとしたのですが、あいにく使用中でした。さらに少し歩いて薩摩街道に出ると片山蒲鉾店がありました。日奈久は竹輪(ちくわ)でも有名です。竹輪が特産品であるということは、海産物が豊かで竹細工の店があるということと無関係ではなからうと考えながら、竹輪をおみやげに買いました。そして、そのすぐ先に木造3階建ての有名な金波楼が見えました。創業は明治43年。玄関部分に使われている材は、床がサクラ、柱はケヤキだそうです。磨きぬかれていました。宿泊料金の案内をもらい、ここも、そのうち泊まりに来ようと思いました(図12)。

最後に案内してもらったのは「織屋」という昔の木賃宿です(図13)。もともとは旅籠屋だった建物を大正時代に現在の場所に移築して、炊事に用いる薪代だけ払えば泊まれる木賃宿になりました。客たちは2階にある八畳二間に相部屋で寝泊りしました。種田山頭火が昭和5年(1929)9月10日から3日間、一泊40銭で泊まったことが知られています。宿の印象は「上」と行乞日記に記しているそうです。現在は使われていないので荒れているように私には見えたのですが、昭和初期の姿がそのまま残っている貴重な建物でした。隣には古いレンガ倉庫も残されています。織屋の

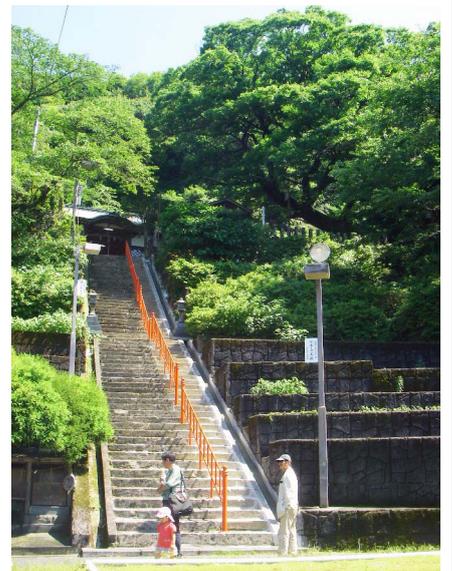


図10 棧敷席から秋葉神社までの階段



図11 明治22年創業の「鏡屋」の入り口



図12 現在も営業している創業明治43年の「金波楼」の廊下



図13 昔の木賃宿「織屋」の入り口

泊り客が多いときには、ここでも寝泊りしたようです。古い長持ちが2個、残されていました。その倉庫の裏口を出ると、昼食を食べたJA倉庫でした。分乗してきた車で松浜軒の駐車場へ戻って解散になりました。午前中1時間半、午後2時間半の八代城下と日奈久ツアーでした。事務局のみなさんや、案内人の会のみなさんのおかげで、盛りだくさんの現地見学会を満喫しました。本当にありがとうございました。古いものを大切に後世に残すためには、日々の手入れを怠らない情熱が必要です。これまで保存・維持に時間と労力をさいてきた方々にも感謝です。そのうち、ぜひ再訪したいと思います。

# 不知火海・球磨川流域圏学会 平成 27 年第 2 回現地見学会案内

## 一秋の五家荘の自然と平家落人の里探訪— つる 詳子

平家の落人の里として知られる五家荘は、球磨川の支流・川辺川の最上部にあたり、九州脊梁の奥深くに隠された秘境の地と云われています。深い谷には滝や吊り橋がいくつもあり、特に紅葉期には素晴らしい景観を望むことができます。今回は、そんな五家荘の自然と、平家の落人の歴史を見ることができる資料館や平家の子孫が住まいにしていたと言われる屋敷等を訪れる予定です。

日時：平成 27 年 10 月 24 日（土）

集合場所：五木村道の駅（熊本県球磨郡五木村甲字下手 2672-53）

※八代の新幹線駅（新八代駅）から乗り合わせ希望の方は、ご連絡下さい。

集合時間：午前 10 時（新八代駅から乗り合わせ希望の方は、新八代駅午前 9 時出発です。）

コース：五木村道の駅 → 宮園阿蘇神社 → 久連子 古代の里 → 椎原（緒方家） →

左座家 → せんだん轟の滝（昼食） → （午後 2 時解散予定） → （八代方面に帰る人）岩奥 から宮原へ

参加費：2000 円（昼食代・ガソリン代）

申込み締切：平成 27 年 10 月 18 日（日）まで

申込み先：つる 詳子（電話：0965-32-7140, e-mail: tsuru-shoko89314@hiz.bbiq.jp）

梅檀轟の滝（せんだんとどろのたき）：熊本県八代市の九州中央山地国定公園・熊本県立自然公園内にあり、日本の滝百選に選ばれた。滝は球磨川の支流である川辺川の上流にあり、チャート（ペルム紀 - ジュラ紀）の断崖からの直瀑である。かつてあったセンダンの大樹から名付けられた。周辺は、「せんだん轟森林公園」となっている。滝の上流には広い駐車場があり、そこから滝壺近くを経て、せんだん轟吊り橋までの遊歩道（九州自然歩道・五個荘コースの一部）がある。

（ウィキペディア：「梅檀轟の滝」より、<https://ja.wikipedia.org/wiki/梅檀轟の滝>）



熊本県八代市泉支所総務振興課ホームページより

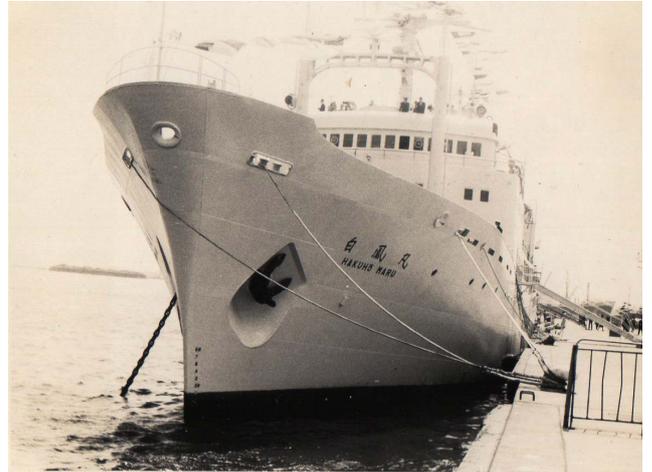
([http://www.city.yatsushiro.kumamoto.jp/gokanosyo/pdf/pamph\\_back.pdf](http://www.city.yatsushiro.kumamoto.jp/gokanosyo/pdf/pamph_back.pdf))

## 初めての外国への研究航海 (KH-67-5)、80 日間

(Tokyo-Rabaul- Honolulu-Tokyo) 大和田紘一

## 1. はじめに

東京大学海洋研究所〈現大気海洋研究所〉は日本学術会議や政府の要請を受けて、全国の大学の共同利用研究所として、1962年に東京大学に設置されました。その頃は、私は大学の2年生だったのでまだ専門も決まっていませんでした。その後、農学部水産学科に進学してみると、海洋研究所には研究船が建造されて、大学院に進学すれば、研究船に乗って研究に従事できるとの噂を聞き、事実、先輩の中で研究船に乗ってプランクトンの研究をしている人たちも見ようになり、私は新しく創設された海洋微生物部門を選んで進学しました。淡青丸という小型の研究船に乗船したのですが、ここでは、最初は船酔いのために、まったく役に立たなかったのですが、白鳳丸という大型の研究船が、1967年に建造されて、しっかりこれに乗るようになりました。ここでは、1967年に行われた、初めての外国への研究航海について紹介をしたいと思います。この航海は、KH-67-5航海と呼ばれていますが、KHは白鳳丸による航海という意味、67-5とは、1967年度の5番目の航海を意味しています。白鳳丸は、その当時は、世界に誇れる最新鋭の大型研究船だったのです。長さが、約100m、トン数では、約2,700トンでした。



1967年に建造され白鳳丸

## 2. 第1Leg.

Legとは、旅行などの期間の区切りを意味します。ですから、第1Leg.は航海最初のTokyoからRabaulへの航海に当たります。12月1日に母港の晴海埠頭を多くの研究所関係者や家族に見送られて、ドラの音を聞きながら出港しました。航海には、全国の大学の海洋研究者が参加していました。私は、まだ大学院の学生でしたが、微生物研究グループには、東京大学の応用微生物研究所から、山里先生や近畿大学の奥谷先生などが乗船されましたが、私が乗船経験が豊富だということで、グループ長を命じられ、テンションが上がっていました。

私の研究課題は、山里先生と、外洋に生息する海洋酵母の種類を明らかにすることなどがありました。さらに当時は海水中に溶けている非常に微量なビタミン類を、微生物を用いた微生物定量法で、明らかにすることでした。ですから冬の海を航海しながらせせと、微生物の分離培養に力を入れました。Rabaulは、当時はオーストラリアの信託統治下にありました。オーストラリアドルは1ドルが400円と大変高価でした。アメリカドルも1ドルが360円の時代だったので、大学院の学生はとても持ち込むことができず、7万円位をやっと持ち込んだのが、記憶に残っています。航海が進んで、熱帯域に入ると熱帯無風帯では静かな海で、甲板では猛烈な暑さに苦しめられました。鏡のような海の中を白鳳丸が進んで行くと、トビウオが驚いて、両側に飛んで逃げていくのですが、トビウオから落ちた水滴がトビウオの進行方向の水面に落ちて輪を描いているのが、とてもきれいでした。

12月も押し迫って、いよいよRabaulに上陸の時は、大晦日になっていました。船上では、餅つきをして、祝ってもらいました。いよいよ上陸してみますと、現地の人は、顔が真っ黒で、おまけに口の周りが真っ赤だったので、いわゆる人喰い人種かと怖がっていたのですが、これは噛みタバコのせいで、噛んでいると口が赤くなってくるのだと知り、安心した記憶があります。上陸後は、大晦日だったので、夜中にレストランに入ると、オーストラリア人の家族と息が合って、彼らの家を訪問して、正月を迎えたのは、楽しい思い出です。

## 3. 第2Leg.

まだ正月のうちに帰港することになりました。このLegでは、主席研究員だった地学分野の奈須先生の研究課題が多く行われました。太平洋中央海嶺付近でのドレッジなどにより、海底の堆積物を何度も採取すると、マンガン団塊 (manganese nodule) や古代に生息していたサメの歯など、大型の試料が採取され、この歯にはマンガンが沈積していて、とても珍しい物でした。

Rabaul には、この航海に参加できなかった私の指導教官の多賀教授から、sp レコードで、相良直美の（世界は二人のために）が送られてきました。航海中には、第 2Leg に入って、いつも食事の間は毎日毎日、このレコードを聴いて、楽しみました。このプレゼントには、今でも感謝しています。

#### 4. 第 3Leg.

第 3Leg. は、特に研究活動もせず、一路日本に向けて走りました。無事、晴海埠頭には 1968 年 2 月 18 日に帰ってきました。当時は、まだ外国に出かけた経験に乏しく、大変貴重な体験でした。この後に、米国の研究船に乗船する機会が多々ありましたが、非常に参考になりました。

#### 5. おわりに

当時は、まだ外国に出かけた経験に乏しく、大変貴重な体験でした。白鳳丸は、1989 年に新しいすばらしい研究船にリニューアルされて現在も活躍中です。私はこの白鳳丸には非常に何度も航海を経験させていただき、特に廃船になって、インドのスクラップの業者に引き渡されて、インドに曳航されていく映像を NHK の番組で見たときには、時代の流れとはいえ、本当に寂しく感じたものです。

## 八代海沿岸の地名 ⑦日奈久と火流浦

佐藤伸二

室町時代の応永 16 年（1409）に、浜田太郎左衛門が海中に自然湧出する温泉を発見したのが日奈久温泉の発祥と言われている。戦国時代には温泉の設備も充実し、有名になっていったようで『八代日記』の天文 9 年（1540）8 月 11 日条に「肥前の竜造寺殿着舟候、日奈久ニ湯治、廿七日帰候」とある。肥前の殿様竜造寺氏の一行を迎え入れ、10 日以上も湯治できる設備があったことがわかる。日奈久温泉は、八代に本拠を移し球磨・葦北・八代の支配を固めようとしていた戦国大名相良氏の管理下にあったようである。日奈久村（日奈久本村）の一部であった湯村が、江戸時代に藩営温泉浴室が大改築されたことなどから、発展して温泉町となった。薩摩藩主は参勤交代の際、海路で日奈久港に入り藩営温泉浴場を利用する習慣があった。日奈久は、中世文書では「日奈子」「日奈古」「比奈古」「日奈木」などと書かれている。日奈久村の中心地は、日奈久駅より北、現在の日奈久山下町や同大坪町あたりで、中世のころの日奈久はこのあたりと考えられている。『肥後国風土記』に「纏向の日代の宮に御宇しめし大足彦の天皇（景行天皇）、球磨贈於を誅ひて、筑紫国を巡狩しし時、葦北の火流浦より発船して、火の国に幸しき」とあるが、この火流浦は日奈久にあたりと考えられている。日奈久は昭和 30 年に合併により、八代市の一部となるまでは葦北郡に属していた。田川内第 1 号古墳（県史跡）（図 2）が存在することなどからも、古代の火流浦が中世以降の日奈久であるとの考えに賛同できる。しかし、気になることもある。球磨地域を征服したのち、火流浦から火の国に向けて発船したのであれば、球磨地域と火流浦をつなぐ古代の道が必要である。どのあたりを通過していたのだろうか。古代の火の国の中心は氷川下流域にあったと考えられている（図 3）。火流浦は葦北の国で火の国には含まれなかったのか、両地域の古墳文化の内容の比較から、その手掛りが得られるのだろうか。



図 1 日奈久阿蘇神社（日奈久大坪町）



図 2 田川内第 1 号古墳と天満宮  
（日奈久新田町）



図 3 古代の「火流浦」はこのあたりであ  
ろう

# 球磨川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書紹介 球磨川の「はね」 つる様子



図1 球磨川の萩原堤における「はね」の場所

人吉から北に向かって山間を流れてきた球磨川は遥拝堰付近で八代平野に至り、この部分でその流れを西に大きく変える。この湾曲した部分が萩原堤である（河口から約 1.9 km の場所、八代市萩原町付近）（図 1）。この湾曲する約 1.8 km の部分のところどころに三角に突出した部分がある。これが加藤清正が築造を開始した「はね」であることを知る人は八代市民の中には結構いるかもしれない。しかし、堤防の上を車で走ったり、犬走りを散歩していたとしても、加藤清正ってすごいなあとその構造物の前で感じる人は皆無かもしれない。天端はコンクリートで覆われているか、樹木やぼうぼうの草で覆われ、また、河道側は三角の根固めブロックが山積みされているからだ。この度、この萩原堤の河川改修工事が行われることになって、この「はね」の保存について検証した結果、工法上施工部分の「はね」を保存することは困難であるとして、発掘調査の結果撤去、記録保存をすることになった。その発掘調査の報告書が今年 2 月 20 日には八代市教育委員会が発行した「球磨川のハネー球磨川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査一」である。この報告書の中に加藤清正の治水や利水に対する考え方やその技術の詳細をみて、初めてこの「はね」が保存すべき価値がある文化財であることに気が付いた。堤防の上から見て、コンクリートで覆われているとはいえ、先人の残した歴史的遺構があることを知りながら、その保存や活用に無関心であったのは、市民の一人として反省しているところである。

萩原堤の「はね」は築造当時は 7 つあり、下流から磯ばね、天神ばね、丸はね、大はね、山下はね、寺ばね、亀ばね（ガメバネ）、と名前が付けられている。一番上流の亀ばねは、水無川の導水路トンネル建設時に撤去されている。改修工事により失われるのは、下流から 3 番目の丸はねから 6 番目の寺ばねまでの 4 つであるので、残されるのは下流の磯ばねと天神ばねの 2 つとなる。この「はね」はその矢穴の形状・大きさが加藤清正時代の城郭のものに酷似していることから（図 2）、17 世紀前半に築造されたものであると報告書にある、また、当報告書に「萩原堤の成立と『はね』」を寄稿されている佐藤伸二氏によると、「最初の遥拝堤は遥拝堰とここから取水する太田井手と同時に築かれた。その役割は八の字形をした遥拝堰の船通を勢いよく流れ出る水を受けるため、水制（はね）も設置された。」とある。今まで湾曲する萩原堤を守るといふ治水ためだけのものと思っていたが、遥拝堰とセットにすることにより、舟運の航路の確保、井手の用水確保、護岸の保護と多角的視点からの萩原一帯の工事であったことが理解できた。

今回の発掘調査では、各はねとも、天端のコンクリートの剥ぎ作業を行ったのち、人による掘削作業で発掘を行っている。石垣や堆積土層の岩や砂礫の大きさや種類、その積み方、野麵積み石であるか割石であるか、栗石であるかなども詳細に記録されている。砂岩が多いが、場所によっては石灰岩も使われている。矢穴の様子から築造後の修復の回数や時代も読み取れるようである。また、偶には土器や磁器の破片や銅銭などの遺物が出土している。今回発掘の対象となった 4 つのはねは、石の材質や積み方が少しずつ違っているが、意図があつて変えたのか、理由も含めそのあたりも分かると面白い。

ともかくも発掘して初めて、「はね」の全体像が分かるにしても、これらを記録保存のみとして終わりにしておくのはあまりにももったいない遺構である。下流側に残る二つの「はね」を築造時のままで見るような工夫があれば、400 年前の過去の偉人の知恵に学ぶものも多いように思われる。遥拝堰が固定堰に変わり、また堤防の改修で萩原堤も強固になった今、この二つの「はね」の価値と役割も見直していいように思う。

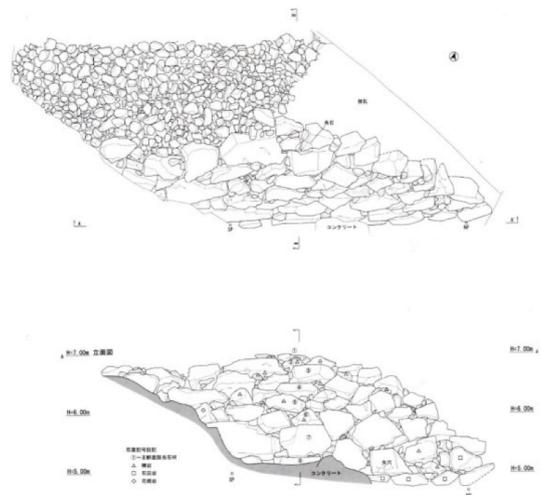


図2 球磨川の萩原堤の「丸ばね」の平面・立面図

# 新事業「残したい水ものがたり」登録地承認報告

残したい水ものがたり WG 森山聡之

平成 26 年度から、不知火海・球磨川流域圏内の将来に残すべき水辺環境を当学会において認定し、水辺の重要性を伝えていこうと、新事業「残したい水ものがたり」を展開することになりました。その事業の趣旨や選定方法、また本年度総会において承認された登録地について、以下ご報告します。

## 1. 残したい水ものがたり事業とは

事業の趣旨：不知火海・球磨川流域圏内の、将来に残したい水辺環境を、当学会が登録地として認定することによって、流域圏内の守るべき水辺の存在を県民に知らせていく。

## 2. 水辺の範疇について

- ・ここでいう「水辺」とは、河川、海岸、溜池、湧き水、水路、その他水の存在がある場所をいう。不知火海球磨川の流域圏内であること。
- ・原則として、候補地の広さは当面 100 m × 100 m の上下一桁（10 m × 10 m から 1,000 m × 1,000 m）程度とするが、残すべき水辺が広い範囲に及ぶ場合は、「特例」として扱う場合もある。この判断は審査委員会が行う。
- ・具体的な候補地の募集、選定、決定を行うための具体的な基準・手順等は、この事業実施が総会で承認を受けた後に設置される審査委員会で作成する。

## 3. 選定の方法（概要）

- ・審査員は会員とし、審査員によって構成される審査委員会が行う。
- ・会員及び非会員の推薦、公募、または役員の自薦により、将来に残したい水辺候補を選出し、審査委員会で検討する。基本的に現場を確認して決定するが、過去学会が実施した現地見学会で催行した水辺は、現場確認を省略することも可能とする。
- ・最終決定に至る過程において、当学会で実施する現地見学会、もしくは別途実施される現地の確認作業に参加した審査員、もしくは会員の意見を踏まえることとする。
- ・候補地の推薦・自薦・公募の手段、また候補地の審査にあたっては、WEB を積極的に活用する。候補地が多い場合、現地見学会や現地確認だけでは、すべて審査することは困難な場合があるので、「候補」として登録して公表しておく。審査して欲しいという要請は会員が WEB 等を利用した投票ができるような仕組みを考慮する。
- ・希少種が存在する場合は、種名を伏せる（公開しない）などの、配慮をする。
- ・国立公園等、公的な保護がなされている場合は重複して認定することはしない。

## 4. その他、事業の手続き等

[公表の方法] 総会で発表と同時に Web による電子地図上で公開する。

[事業の実施回数（決定日）] 毎年 6 月 5 日頃（総会前後）

- ・特に多くの要望があった場合は、現地見学会を増やすことを考慮する。これは学会の活性化にも繋がる。
- ・過去、現地見学会実施済の場合は、総会時プレゼンと投票で決定する。
- ・詳細については、事業実施決定後審査委員会において検討し、決定する

[事業主体] 不知火海・球磨川流域圏学会

## 5. 2015 年度登録地

### I. 荒瀬ダムボートハウス（八代市坂本町葉木）

荒瀬ダムの完成に合わせて、ダム湖を利用したスポーツ施設として平成 7 年 3 月に竣工した。荒瀬ダムを漕艇場として利用していた高校・大学のボート部の合宿所として使われていました。競技が行なわれる際は、本部・観覧場となり、空いているときには近隣住民の集会にも利用できる。美しい山並みと、四季を通しての自然環境を活かし、清らかな水をたたえた球磨川、地形を利用することにより水との触れ合いや交流の場を提供することを目的としています。「緑深い山間、湖面に映える 建物のシルエットとカラ



選定された「残したい水ものがたり」登録地ポスター



フルなポート」をデザインのコンセプトとしている。白ペンキ仕上げの外観は、ボードのクラブハウスにふさわしい力強さを表現し、周囲の自然景観とよく調和しています。1,2階ともダム湖沿いに一直線に100m近い廊下を配置して、トレーニングルーム、研修室等諸室を付加したシンプルな平面構成としている。そして、木造建築物の特徴である胴縁と筋かいを建物全体にわたって基本的な意匠コンセプトにしています。荒瀬ダムの撤去にともない平成22年4月1日をもって休館となりました。

## II. 黒瀨 河川自然公園（熊本県八代郡氷川町）

自然の川遊びが出来る公園で、夏には沢山の子供連れで賑わいます。東陽町と五木村の境の大通越を水源にして渓谷を流れてきた綺麗な川を黒瀨地区で堰を作り農業用水を取水している処です。堰が出来たので川床が上がり子供の遊び場として最適な場所になり公園化したものと思われます。上流は住民が少なく急峻な地形で緑も多く木立を流れる風は夏でも爽やかな所です。東陽町は石工の町と言われるように近くには石造りの橋が多くみられます。上流では水しぶきを上げて流れてきた水が、堰の所で浅くなり子供たちでも安全な深さとなり低学年の子供でも安心して遊ばせることが出来ます。小魚や水生昆虫等の姿も見ることが出来ます。堰の上流へ行けば、深い所や岩場があり、堰下流では自然の滑り台も楽しめます。トイレも水道設備もあり、キャンプを楽しんでいる人もいます。川の反対側にある小高い丘に登ると、川の流れが山を削って流れている所や緑豊かな山々が一望できます。自然と触れ合える公園です。



## III 深水湿原（球磨郡相良村深水）

深水湿原は、30年ほど前までは田圃として人が利用してきた湿地であり、そこでは様々な生き物が普通に見られました。デングソウやホシクサなど今は絶滅寸前となった植物だけでなく、ハッチョウトンボ・オオイトトンボ・アジアイトトンボ・オグマサナエなど県下でも珍しいトンボや、県下で初めて発見されたエゾトンボ、ハッチョウトンボの棲息も確認されています。しかし、ここは深い田圃であったために構造改善事業から取り残され、放棄されたために、現在ではヨシに覆われ失われようとしています。また、多くの里山で失われつつあるタガメ・タニシ・トノサマガエル・メダカ等もここではまだ見ることができます。現在は、相良村の予算による一部耕耘はなされているものの、保全対策としては十分ではありません。縄文時代より人の暮らしと共に存在してきた生き物や、その生息地を積極的に保全していくことは、この流域の健全度を守るだけでなく、日本の生物多様性保全の観点からも重要です。



## IV. 大野川河口（宇城市松橋町松橋）

見事に発達したヨシ原にヘナタリ類やスナガニが、河口から形成される干潟にもヘナタリ類やムツゴロウなどのRDB<sup>1)</sup>に掲載されている多くの底生生物が生息している希少な場所です<sup>2)</sup>。また、ここ松橋町は、明治まで大野川の河口港として栄えた町です。鉄道の発達により舟運が妨げられ衰微した模様です。よって、歴史的にも生態系からの側面からも、「残したい水ものがたり」に登録するにふさわしいものです。

### 参考文献

- 1) 改訂・熊本県の保護上重要な野生動植物—レッドデータブックくまもと 2009— ([http://www.pref.kumamoto.jp/kiji\\_709.html](http://www.pref.kumamoto.jp/kiji_709.html), 2015.4.11 現在)
- 2) 調べます！全国の干潟 大野川河口 (<http://www.biodic.go.jp/higata/h108.html>, 2015.4.11 現在)

## V 球磨川河口 水島地先（八代市水島町）

球磨川は八代市において球磨川本流、前川、南川と別れ、日本一の三角州を形成し、八代海に注ぐために、1000ha という広大な干潟を作っています。かつて干潟は多種多様な生き物の生息地であり、市民もアサリやハマグリなど貝掘りを楽しむなど八代海の恵みを楽しんできましたが、戦後の河川工事やダム建設等により砂干潟は泥干潟に変わり、生き物は種数とも減少した。しかし、ヤマトオサガニ・ゴカイ等多くのベントスが生息するこの場所は渡り鳥の餌場となり、シギ・チドリネットワークの登録地ともなっています。荒瀬ダムの撤去工事開始後、この球磨川河口の左岸干潟には砂が供給され始め、ミドリシャミセンガイやハマグリ、マテガイ、オサガニなど増加の傾向を見せていたものの、人が入れるようになったことでオーバーユース気味です。また、アナジャコ捕りの際に干潟の表面を大きく削ることにより、アナジャコ以外の生き物が棲めなくなっています。干潟の回復のためには、広大な左岸干潟の人の利用を一部制限しつつ保全していくことが必要であり、そうすることで、人や鳥、その他の生き物が共存でき、持続可能な干潟利用の可能性も生まれてくるものと考えます。広大な球磨川河口 干潟の利用と保護を考える上で、ここは特に重要な干潟であるといえます。



## VI. 雨宮神社（球磨郡相良村川辺）

川辺川に架かる相良大橋から五木方面に目を向けると、広い水田の中にこんもりとした森が見えます。その様子から「トトロの森」とも呼ばれる“雨宮神社の森”です。息が切れそうな112段の急な石段を登ると、雨宮神社の社（やしろ）が木々に包まれるように在ります。文明4年（1472年）、球磨地方での大干ばつの際、当地を治める相良藩主が雨宮神社に雨乞いの祈願を行い、帰路につくころには大雨が降り出したという故事から、雨乞いにご利益がある神社として敬われ、現在でも干ばつの際には多くの人々が参拝に訪れます。また社のそばには、「三産（しゃんしゃん）くぐり」と呼ばれる約2mの長さの巨石のトンネルがあり、そこをくぐると「幸せを生む」「安産」「金を生む」というご利益もあるとされています。神社の創建は不明で、かつては神秘的なこの森自体が祈りの対象となっていたのではないかとされています。最近ではアニメ「夏目友人帳」の舞台の一つとして登場したことから、遠方から訪れるアニメファンもみられます。



## 6. 今後の予定

### I. 登録地の公開

流域圏内に、国立公園・県立公園等の指定地以外にも、将来に残すべき水辺環境が存在することを、知ってもらうために、WEB等を通じて結果を伝えていく。

### II. 候補地の公募

残したい水辺環境を当学会だけで把握していくことは困難であるために、WEB等を活用して圏内に存在する残したい水辺環境の情報を収集する。

### III. 水ものがたりを編む

この事業を重ねることによって、住民自身の水辺環境に対する記憶の掘り下げをおこない、それぞれが「私の水ものがたり」を編んでいけることを目標とする。